

古民家新聞

匠を感じる住まい

vol. 32

陽春の候、皆様お花見は楽しませましたでしょうか。全国古民家再生協会では、2月に東京、半蔵門にて全国大会が開催され、全国から会員を中心とした300名以上が集合し交流を深め、基調講演では東京大学大学院准教授 前真之氏・一般社団法人 全国優良工務店支援協会 代表理事 大沼勝志氏のお話によりこれからの古民家に必要な知識を深めました。さて、今回は前回特集した神宮の材木の話題を少し広げて、天然乾燥材についてご紹介いたします！

天然乾燥材ってどんなもの？

木造住宅に使われる木材は伐採してすぐには水分が多く、そのまま使うと割れや狂いが大きくなってしまいうため、通常多くは乾燥させて使います。切りたての木材の含水率が20%前後あるものを20%前後にまで乾かします。(伝統工法では屋根部分に使う材料は生のまま使い、木組みをした後に乾かしていくことで小屋組みをより強靱にさせる手法もあるようです。)

木材の乾燥方法には大きく2つに分類されます。一つは天然乾燥、もう一つは人工乾燥です。双方の違いは乾燥させる際の木材の周りの空気

人工的に熱を加えるか加えないかの違いです。自然の空気中で乾燥させる天然乾燥の中にもいろいろな種類があり、神宮の木材のように水中に没してから大気中で乾燥させる「水中乾燥」や、伐採した木を積み上げて乾かす「積み乾燥」、また伐採ののちに葉をつけたまま一定期間乾燥させる「葉枯らし乾燥」などがあります。それぞれの乾燥方法は地域や林業家によって期間や組み合わせは様々です。そこで今回、天然乾燥の一つの例を追うため葉枯らし乾燥の現場を取材させていただきました！

葉枯らし乾燥をピックアップ！

取材協力いただいたのは津市美杉町のNPO法人もりずむさん。地産地消で地元の木を伐採・葉枯らし乾燥や製材をして家づくりの現場に出荷するまでを担っており、その工程をおおまかにご紹介します。

地域や気候によりですが杉の場合、山で木を切り倒し、そのまま葉がついて倒れた状態(写真①)で半年〜1年程度置いてから材料を山から降ろします。伐採したての杉の含水率は20%前後ありますが、葉枯らし乾燥の最初の3か月で含水率80%程度まで自然の力で乾燥が進みます(木材の重量はこの段階で半分以下になります！)。葉枯らし天然乾燥は、葉をつけたまま山で乾燥させることにより、葉が枯れるまでの3〜6か月間、光合成による蒸散作用で幹の水



写真①



写真②

分がより早く抜けていきます。また、山から降ろす時には最初の半分以下の重量になっているので運搬エネルギーも少なくて済むという利点もあります。

写真①は切り倒したその場で杉皮をはいだ状態で乾かしているもの。夏秋に伐採した

杉は手作業で皮がはがれやすく水分量が程よいので、杉皮だけ先に数寄屋建築などに使用する建築資材として出荷されます。その後1度目の製材(粗挽き)をして土場と呼ばれる山と湿度・気温に近い場所です野晒し積みでさらに半年乾燥したのち、屋根付きの場所ですさらに半年〜1年出荷を待ちながら乾燥を重ね(写真②)、注文が入ると仕上げの製材をして家づくりの現場に運ばれます。山で伐採してから家づくりに使われるまで最低1年半を要しているのです。

このように、木材の乾燥ひとつをとっても多種多様。これからも古民家のように本場に長持ちする住宅を木材から考えていきたいですね！

お問い合わせは

一般社団法人 三重県古民家再生協会

〒510-8016 三重県四日市市富州原町10-6 TEL059-366-3833 FAX059-361-1717 mail info@tap-s.com

kominka-mie.org